



243号
2019/5

日中文化交流市民サークル「わんりい」
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp2018/7/1



水族：貴州省黔南ブイ族ミャオ族自治州の三都水族自治県を中心に、近隣諸州と広西壮族自治区の西北部及び雲南省東部にわたって居住する。自称は「アイ・スイ」（「水辺の人」の意）。出行、喪葬、婚姻、農業など、すべての行動は巫師の占トによる吉凶によって行う。巫師がその占トと吉凶の記録に使う文字が水字であり、記録し伝承された書物は水書と呼ばれる。

（貴州省三都水族自治県にて 2018 年 7 月 チベット高原初等教育・建設基金会代表 烏里烏沙撮影）

‘わんりい’ 2019 年 5 月号の目次は 20 ページにあります

今月の言葉は寡聞にして、同義のものを見つけることが出来ませんでした。

・>・>・>・>・>・>・

明朝末、顧炎武こえんぶという有名な学者がおりました。清の軍隊が山海関より侵入して来た時、顧炎武の母親は清兵に右腕の切り落とされてしまいました。弟も殺されてしまいました。国家の敵に家の恨みも重なって、顧炎武の清朝に対する怒りはとても激しいものでした。

彼は、「天下興亡，匹夫有責（天下の興亡は一般の人々にも責任がある）」と主張しました。意味は「民族の存亡には、国民一人ひとりにも責任がある」ということで、彼はこの言葉をこれ以後の自分の行動基準に決めました。

清朝政府は、何回も人を遣わして、清朝のために働くよう要請しましたが、使いの者を全く相手にせず、自分の明朝に対する忠誠心を明確に示しました。

・>・>・>・>・>・>・

言葉の意味：匹夫＝一般の人、責＝責任。全ての一般の人にも責任があるという意味で、国家存亡の時期にはよく使われる。

使い方：国家の存亡には、一般の人々も責任を負わなければならないというから、すべての中国人は皆、国家の大事に関心を持たなければならない。

・>・>・>・>・>・>・

この言葉、明末清初の学者の言葉で新しいせい、私が持っている四字成語の辞典には載っていません。今ご紹介しているこの幼稚園児対象の成語の絵本には、日本で出版された四字成語辞典には載っていないものが多々あるのですが、今月のこの言葉は中国の子供向け成語辞典にも載っていませんでした。この本が、有名小学校お受験用の絵本である証あかしでしょうか。

この言葉を言った顧炎武という人は、明末清初に生きた思想家・学者で、清代に起こった考証学の祖とされています。

清の侵略に対して、故郷で義勇軍を組織して清の支配に抵抗し、各地を流浪しながらも、書物を馬に積んで帯同し、文献と現地を照らし合わせた実証的な研究を続け、考証学の手法を確立しました。

彼が方向性を示した考証学は、清代に盛んになりましたが、彼自身は清朝政府の再三の要請にも関わらず、清朝に仕えることはありませんでした。私は、国民が国の政治に参加する道が全くない中国で、このような考え方があることを初めて知りました。

中国の正史は、王朝が亡んだ後、次の王朝の下で編まれるのが常で、前王朝の最後の皇帝は殊更に悪く言われることが多いようです。そのことで現王朝の正当性が裏付けられ、易姓革命の傍証とする為でしょう。

そんな歴史が語り継がれている中国で、国の興亡が一般の人々にも責任があると考える人がいたということとはとても新鮮な驚きでした。

丁度今、民主主義の先進国と目されるイギリスが、EU 離脱問題で、国としての合意案を見つけられないのを見て、民主主義の限界を見

たような気がしていましたが、この言葉を聴いて、イギリス国民ももう少し真剣に議論して妥協案を見つけるべきだと考えるようになりました。思わぬところから、民主主義の本質を突かれたような気がします。

でも日本も他国のことをあれこれ言う資格はありませんね。友人同士の会話では、政府に対する不満を言い合っている、自分たちの意思表示が出来る唯一の機会である選挙にも拘らず、参加する人が少なく、毎回驚くような低投票率で我々の代表が選出されているのですから。



挿絵：満柏氏

知之為知之，不知為不知

之を知るを之を知ると為し、知らざるを知らざると為す(為政第二)

桜美林大学名誉教授 植田渥雄



ある時、孔子は子路を呼び寄せ、次のように諭しました。「由！悔女知之乎。知之為知之，不知為不知，是知也（Yóu！Huì rǔ zhī zhī hū？ Zhī zhī wéi zhī zhī， bù zhī wéi bù zhī， shì zhī yě）」（由よ、女に之を知るを誨えんか。之を知るを之を知ると為し、知らざるを知らざると為す。是れ知るなり）(為政第二)。「由(子路)よ。今日はお前に『知る』ということの意味を教えてやろう。それはな、知っていることは知っているとして自覚し、知らないことは知らないとして自覚すること。これが『知』るということなんだよ」と。何でもかんでも知ったつもりでいると、知識はそれ以上進みません。知りたいという欲望も湧いてきません。孔子が子路に伝えたかったことは、「知」は「未知」を自覚することから生まれる、ということでしょうか。

これまで何度も出てきましたが、子路は勇気と決断力で後世に名を残しています。魯の国の権力者季康子が、子路を政治家として使えるかどうかと孔子に訊ねた時、孔子は次のように答えています。「由也果。於从政乎，何有！（Yóu yě guǒ。 Yú cóng zhèng hū， hé yǒu！）」（由や果なり。政に従うに於いてや、何か有らん）(雍也第六)。子路は決断力があるから、政治をやらせても何ら問題ない、と。このことから、政治には決断力が必要という、この一点で、孔子が子路を高く評価していたことがわかります。一方、孔子にとって気掛かりなことは、子路が己の勇におぼれて、生命を軽んじることでした。常に勇み肌の子路に対して、孔子は「あんなことではまともな死にはできないだろう」と危惧していました。案の定、子路は自ら仕官していた衛国の内乱に巻き込まれて非業

の最期を遂げることとなります。

さらにもう一つ、それは、子路が傲慢で人の言うことに謙虚に耳を傾けることをしない点でした。ましてや子路は孔子の弟子の中では最年長です。後輩たちの前で大言壮語したり、独断専行したりすることがあっても、孔子を除けば、これに忠告を与える人は極めてまれであったようです。子路はまた書物から地道に学ぶことも苦手でした。

こんなこともありました。子路は魯の季康子に仕えていた頃、年若い後輩の子羔を費という地域の宰(長官)に抜擢しました。まだ学問の経験も浅い子羔にとって、この職は重荷ではないかと心配した孔子は「未熟な青年をそんな重い地位につけたら折角の人材を却って駄目にしてしまうのではないか」と忠告しました。これに対して子路はこう反論しました。「人民がいて国家があります。これを治めるにはまず書物を読んでから、というわけのものではないでしょう」と。学問は実践を伴わないと意味がないというのは孔子の持論でもありました。だからそのことを逆手に取り、生半可な知識を振りかざして恩師に盾ついたのでしょう。しかし他の弟子からならともかく、子路の口からその言葉をきくことに孔子はいささか困惑したようです。それは、書物を通じて先人の残した叡知から真摯に学ぶという向学心、その向学心の欠如を感じ取ったからでしょう。やっぱりそうか、お前は……。そこで孔子はつぶやきました。「だから私はそういう減らず口を叩く輩が嫌いなんだよ」と。

それでも孔子は、子路の飾り気のない一途な心を愛してやみませんでした。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

お爺さん三人の大連の旅(3)

寺西俊英

8月14日の朝である。6時半に起床してSさんとTさんの部屋に行き、一緒に38階の展望レストランに向かった。昨日は朝5時に丹東に向かったためホテルで朝食が摂れなかったのだ。今朝はゆっくりと360度の展望を楽しみながら食事しようということにした。李さんとは9時にロビーで待ち合わせることになっている。展望レストランは食卓が置かれている幅3~4メートルの窓側部分がゆったりと回転し、5分くらいで1回転して元の位置に戻る。各種の料理が置かれているところは動かないので、お替りしようとする料理によっては随分遠くまで歩いて行って、そこでお皿に載せることになる。

展望レストランからは晴れているので大連湾の向こうの経済開発区まで見渡せる。私の好きな「大黒山」も見える。戦前は「大和尚山」とも言われたが頂上付近には高句麗が築いたと言われる古い城壁があり、隋の征討軍が苦戦したところである。今でこそ東北地方は中国の領土であるが、当時は高句麗、それに続く渤海など漢民族から見れば異民族が支配していた地域である。標高600メートル位の山だが周囲に高い山が無いので美しい山容が際立っている。港に目をやるとそこには航空母艦の「遼寧」がドックに入っていた。ロシアの中古の空母を購入し改造した中国の航空母艦第一号である。これで思い出すのは一昨年大連に行った時、友人が、「中国は航空母艦を保有できたが日本にはありますか？」と自慢そうに訊くので、「日本は憲法の制約があつて今は保有していないけど、第2次世界大戦の時は何隻も保有して米軍と戦ったんだよ」と言うと黙ってしまった。因みに最初から空母として設計され建造できたのは世界で日本が初めてだということをご存知であろうか。「鳳翔」という名の空母で1922年に竣工している。日本の空母は客船から改造されたものも含めると、第2次世界大戦が終了するまでに延べ20隻余りを建造している。

食事をしながら昨日の丹東での話に熱中してい

ると、そのうちにどこかの小学校の生徒が大勢来て静寂が破られた。8時を少し回ったのでこちらが潮時とレストランを出た。9時前にロビーに降りると李さんはすでに来ていた。いつも時間は正確である。ホテル前に待機している、李さんが手配してくれたハイヤーに乗り込み旅順に向けて出発した。順序としては「水師営」からがいいと言うのでそちらに向かう。水師営は言うまでもなく1905年に日露戦争が日本の勝利で終わった時、停戦条約が締結され乃木大将とステッセル將軍の会見が行われたところである。古ぼけた茅葺風の平屋の建物がその場所だが、100年余り前の建物と同じように1996年に復元されたそうだ。敷地の一角にはこれも何代目か知らないが“なつめ”の木が枝を広げている。ステッセル將軍はこの場所まで白い軍馬に跨り到着したが、着くとなつめの木に白馬を繋いだので有名である。なつめの木を見ると、国文学者で歌人の佐々木信綱が作詞した「水師営の会見」という歌の2番を思い起こす。この歌は9番まであるが、「庭に一本なつめの木、弾丸跡もいちじるく崩れ残れる民屋に今ぞ相見る二將軍」がそれである。

両將軍が会見後、記念写真を撮ることになった。乃木大将とステッセル將軍を中心に9人の軍関係者で取り囲んだ有名な写真がある。戦争をした両軍の將軍達が仲良く記念写真を撮るのは極めて珍しいことである。この写真は従軍した光村印刷(株)の写真班が撮影したもので、同社はこのことを大変誇りに思っているそうだ。同社は東証一部上場の印刷出版業界では有名な会社で、本社は品川区にある。ちなみにステッセル將軍が乗って来た白馬は、乃木大将の敵将への帯刀を許した遇し方に感激した將軍が記念に乃木大将に献上している。この馬はその後日本に連れて帰り軍馬の種馬となり、最後は鳥取県のある牧場で23歳の生涯を終えている。恩讐の彼方に、の国際版である。会見場の建物の敷地を出たところに土産物のコーナーがあり、当時の説明をしてくれた日本語の堪能な

係りの女性に導かれ、そこで3人は売りに協力した。なお「水師營」は、清朝の北洋艦隊の隊員の駐屯地の意味であり、この地名にもなった。

次に「旅順監獄」に向かった。旅順監獄は、1902年ロシア帝国が建設を始め日露戦争で日本が受け継いだ形となり1907年に拡張して完成した。1945年敗戦後ソ連が旅順に入り解体してしまった。1971年に再建され「旅順日露監獄旧址」として陳列館となった。正面から見ると2階建てのいかにも近寄りたがたい感じの建物である。当日は天気も良く日差しが強いので街路樹の下に車を止め我々3人で見学した。内部はあまり気持ちのいいものではないので説明は割愛したい。一つだけ紹介したいのは、「安重根」の独房である。独房の外壁に、中国語、英語、ハングル、日本語の説明文が本人の写真と共に書かれていた。安重根は皆さんよくご存知と思うので簡単に触れたい。安重根は朝鮮の独立運動家と言われている人物で、1909年10月26日に前韓国統監の伊藤博文をハルビン駅構内で暗殺した。伊藤博文は日韓併合に反対の立場であったのだが、この事件により併合の機運が高まり1910年に併合したと言われている。当時のハルピンはロシア帝国が権益を持っており、ロシア官憲に逮捕され日本の関東都督府に引き渡され旅順監獄送りとなった。殺人罪で伊藤博文の月命日に合わせ、1910年3月26日にこの監獄で処刑された。

本件は、クリスチャンであった安重根と日本人看守との交流があった、などの後日談がたくさんあるが紙幅の関係でここでは触れない。

ここを後にして本来なら203高地に行くのであるが、残念ながら今工事中で行けないということなので「白玉山」に行くことにした。海拔130メートルの高さで山というより丘に近い。車で頂上まで行くとそこに大きな塔が屹立している。この塔は「白玉山塔」といって、日露戦争後東郷平八郎と乃木希典が発案して建立した慰霊塔である。1909年に戦没者追悼のために建てたもので66.8メートルもの高さがある。北京から遠く離れていたためか、紅衛兵に破壊されずによく残ったものだと思う。建設時は「表忠塔」と命名したが、中華人民共和国になって「白玉山塔」と



ホテルからの風景。手前が大連駅。左上がドックに入っている、遼寧。

改名された。この塔のある所からすぐ前方が旅順湾である。有名な虎のしっぽと呼ばれる砂州と湾口が綺麗に見えカメラに収めた。日本軍は旅順湾内に集結していたロシア艦隊を203高地から砲弾を注ぎ全滅させたのだ。湾口から外に逃がさないようにするため、巾着の口のように狭くなった湾口に犠牲者を出しながらも何隻もの船を沈めたことはご承知の通りである。ネットによれば白玉山の命名は李鴻章（1823年～1901年）だとある。彼は日清戦争（1894年）終結時、下関条約調印時の清国代表として記憶されている方が多いのではないだろうか。旅順は、清国の北洋艦隊の基地であり事実上李鴻章の軍隊でもあったので旅順には縁が深くて何かの折名前を付けたのかもしれない。今回の文章は戦争に関する事項が多くて恐縮しているが、事実としての歴史は知っておく必要がある。

お昼になったので、近く中華レストランに行った。旅順駅のすぐ近くである。この駅は、昔は満鉄の拠点駅でにぎわったらしいが今は一日数本の列車しか走っていないらしい。当時のままのネギ坊主のような屋根が乗った形の緑色を施した洋風の駅舎で、とても印象的な駅である。レストランでは「打卤面（あんかけ麺）」がこの店の名物とPRされたので全員この麺を食べたが大変美味しかった。卤（ルー）とは、片栗粉を混ぜてとろみを付けたものをいう。食後やはり日露戦争の激戦地である「東鶏冠山」のロシア陣地に立ち寄った後、大連市内の星海広場に向かった。以下は次号で紹介したい。（続く）

東西文明の比較(34)
日本は、移民先進国

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

少子高齢化に悩むわが国は、労働力を補うために海外から「労働者」を誘致することにして法改正もしました。この措置に、将来の「移民」受け入れになるのではないかと、否定的な意見が多く見られます。しかし、私は「移民」受け入れに賛成です。今回は「移民」について述べたいと思います。

今から20余年も前のロサンゼルスでの経験です。ダウンタウンでのこと。大勢のヒスパニックのグループ

に遭遇しました。びっくりして眺めていたところ、友人(白人系)が、私の胸中を察して教えてくれました。

「彼らのケアは必要だが、彼らの次代の子どもたちは必ずわが国の発展に貢献するだろう」

私は、その言葉を聞いてさすが「移民の国」アメリカだと感心したものです。

※日本は移民先進国だった

「東西文明の比較」をシリーズで書かせていただいておりますが、その初期段階で「縄文」時代の頃を読み返してみました。そこで、その一部を反芻してみます。

約7万年前から1万年前まで続く超低温期。(中略)大陸からは動物群の移動があり、マンモスはシベリア、サハリンを経て北海道へ南下し、ヘラジカ・ヒグマ・野牛などは本州まで到達した。他方、中国大陸北部に分布したナウマンゾウ・オオツノシカ・ニホンジカが朝鮮半島を経由して西日本へ移住した。人類(ハンター)たちはそれら

の動物を追って東(現在の日本列島)へ移動したのである。重要なポイントは「アジア大陸からの道」が「シベリア経由で北海道・東北地方へ」と、「朝鮮半島経由で九州・西日本へ」と2本あったこと。そしてこれらの道から移入した文化はやがて関東・中部地方で交わるが、日本列島には二つの文化圏ができる。(中略)13,000年続く縄文時代、弥生時代・古墳時代、そして現代まで続いている。(以下略)

特に最近の研究では、縄文人のDNAが東北地方と関西地方では異なる結果が証明されたことに注目。弥生時代までの日本列島における文化の発展は東北・関東で高い。弥生・古墳時代から九州・関西の文化の進展が高くなっていることは、その時代と大陸交流(移民)の関係が影響している……。

※弥生人の渡来と稲作の始まり

紀元前8～前3世紀ごろの中国は、春秋・戦国時代でした。このころ、多くの人々が大陸から日本列島に渡来してきました。多分、戦乱を逃れて安定した暮らしを求めて来たのでしょう。先住の縄文人と渡来の弥生人の間には、目立った争いはありませんでした。縄文人たちが渡来人を受け入れ、仲良く棲み分けしていたのでしょう。徐々に人種間の共生・婚姻などが進み、やがてひとつの民族“弥生人”となって、日本人の祖先となりました。

この渡来人は、多くの文化を在来の日本人たちに伝えてくれました。その最大のモノが稲作です。急速に広まった稲作は、「稲穂たなびく豊饒の国、日本」を作り上げました。

稲を育てるためには、豊富な水を必要に応じて取り込み、排水も必要です。灌漑施設の充実です。川の水を引き込む水路の建設には多くの人力の

協力が必要になります。そのためには共通の利害関係を持った集団が必要です。集団を統率するリーダーが生まれ、「ムラ」とよばれる集団ができました。更に多くの道具も伝播しました。鋤や鍬、水田を歩く田下駄(たげた)、石包丁や杵・臼などです。これらの道具はやがて青銅や鉄器になります。これら稲作技術や道具などは、北部九州から始まり、数百年かけて東北地方にまで普及したのです。

※新日本人=弥生人の暮らし

弥生時代といえば水耕稲作といわれますが、実態は違います。稲作には凶作、不作がつきまといまいます。現在もそうですが。そこでどうしたのでしょうか。縄文時代から続くイノシシ・シカなどの狩猟や漁労による魚介類の確保です。更にドングリなどの木の実採集も重要でした。弥生人も縄文文化の重要性を認めていたのです。

弥生時代には、稲作と同様に機織り技術も渡来します。それにより「貫頭衣」(かんとうい)が普及します。弥生人は「おしゃれ」でした。ガラスや碧玉(へきぎょく)、貝などで作られた首飾り・耳飾り・腕輪・指輪などの豊富な装飾品を身につけていました。一部の権力層ですが。

弥生時代の葬送にも特徴があります。北部九州では巨大な甕(かめ)に遺体を入れて土中に葬る「甕棺墓」(かめかんぼ)、土中の甕棺や石棺などの上に大きな平石を置いた「支石墓」(しせきぼ)が発達。近畿地方では10~15メートル四方の方形の溝を巡らし、溝の内側に棺を設けた墳丘を作るという「方形周溝墓」(ほうけいしゅうこうぼ)が広まり、これがやがて日本各地へ広まっています。一方、東日本では「再葬墓」があります。文字通り二度埋葬することです。一度目の埋葬で骨になった遺骨を壺型の土器に入れて再度埋葬

する方法です。

※続縄文文化(北海道)と貝塚文化(沖縄)

弥生時代、北海道と沖縄は若干異なる文化が栄えていたようです。北海道から述べてみます。

寒冷な土地であるため、当時の技術では稲作の展開は難しかったので、漁労や採集を進化させていました。カジキマグロやイルカ、鯨やアザラシなど大型の魚類や海獣を捕獲するため、高度な道具を開発していました。例えば、「離頭鉞」(りとうもり)です。獲物に突き刺さると刃先の部分だけ外れ、獲物の体内に残り、抜けなくなるという強力な武器です。

しかし、彼らは文化の交流を拒んでいたわけではありません。北は樺太、南は南西諸島からもたらされたとされる「琥珀」や「貝殻」などが、北海道の遺跡から発掘されています。これら北海道独自で発展した続縄文文化は、オホーツク文化とよばれる文化へと発展。平安、鎌倉時代まで続いています。

一方、沖縄を初めとする南西諸島にも稲作は普及していません。稲の収穫時期の秋は台風シーズンに当たり、米を主食にするにはリスクが高かったからでしょう。しかし、この地方には、それを補ってあまりある海洋資源に恵まれていました。また、彼らには魅力的な産業がありました。豊富な貝殻で作る「アクセサリー工房」です。他の地方では入手できない貝殻で作るアクセサリーと米などの食糧や鉄製の道具と交換して生計を立てていたのです。これを貝塚文化と呼びます。この文化も平安時代まで続いています。

一般的に言う「弥生文化」は、厳密に言うと、北海道の「続縄文文化」、本州・四国・九州の「弥生文化」、南西諸島の「貝塚文化」という三つの文化圏が同時に発展していたのです。

中国語で嘉絨（発音はジャーロン）と呼ばれる四川省アバ藏族羌族自治州西部とガンツー藏族自治州中東部の地域は、ギャロン・チベット語（中国語で嘉絨蔵話）でギャルモロン（意味は女王の谷^{注1)}）と呼ばれ、女王谷の名前から察する通り、主要な神々は全て女神です。先ず、凡そ 2000 年前から始まる女王谷の歴史^{注2)} において最高位の土地神として崇められているのは中国語で墨爾多（発音はモルド、チベット語でムルド）と呼ばれる山神＝モルド山^{注3)}、4820m です（写真 1）。

現在各地に残るモルド山神の絵は殆ど男の軍神として描かれていますが、これは 18 世紀中期の金川戦役以降の現象と考えられ、元々は女神だと伝承されています。それはモルド山神の宿る山が元来ギャロン・チベット語で「女王の尖った岩^{注4)}」を意味するギャルモ・モルド（ワイリー式転写字表記で“rGyalmo-murrdo”、チベット語でギャルモ・ムルド）である事からも明らかです。名前の由来はムルド神が宿るモルド山の写真を見て頂ければ一目瞭然です。伝承では、この女神は女王谷に棲んでいた妖精ラモダンデンマ^{注5)} で、凡そ 2000 年前にシャンシュン（中



写真 2：領主の館跡に残るモルド神の壁画

国語で象雄、紀元前からチベット高地で栄えた女王国で 7 世紀に吐蕃王国が滅ぼした）から東チベットのゴンブー（中国語で工布、チベット語でコンポ）を經由して、ボン教を携え^{注6)} 移民して来た王子と結ばれ、後に女王谷初期の 4 公国^{注7)} を作る 4 人の息子を産んだ後、モルド山に籠って土地神になったとされています。この移民達はモルド山にシャンシュンの最高位の土地神であったカンリンポチェ 6638m “Kangrinpoche” またはカイラス “Kailash”（中国語で岡仁波齊または凱拉什）を想起したかも知れません。

現在各地に残るモルド山神の絵では殆ど驢馬に乗っていますが、東女国（唐時代 618～907 年の歴史書である唐書に記録された 7 世紀前後に女王谷に有った国）の流れを受け継ぐ 800 年の

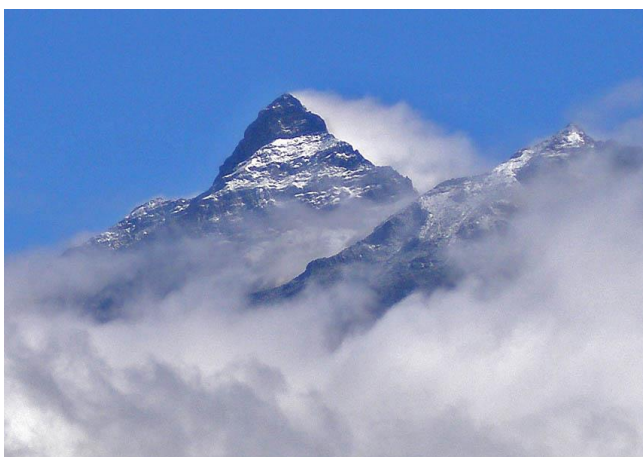


写真 1：モルド山 4820m

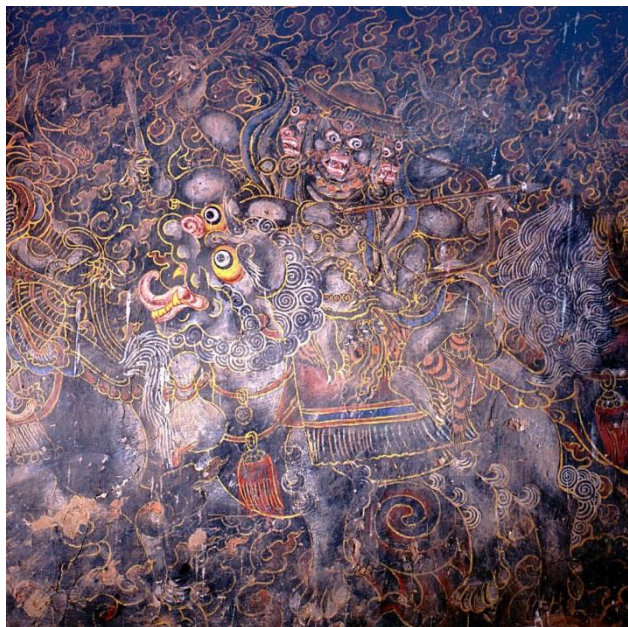


写真3: 古いチベット仏教ニンマ派のお寺に残るモルド山の壁画

歴史を持つ領主の館跡に残るマニ堂に伝承されているモルド山神は獅子（ライオン）に乗っています。これはボン教が古代ペルシャ起源の拝火教の影響を受けている（ライオンは古代ペルシャの聖獣）事に関わるのかも知れません（写真2）^{注8)}。また同じ構図の壁画がモルド山を間近に望む集落に在る古いチベット仏教ニンマ派（中国語で西藏仏教寧瑪派または紅教）のお寺にも残っています（写真3）。

■注

1) ワイリー式転写字表記で“rGyalmo-rong”、ゲェルモロンとも発音します。女王谷の語源について「四姑娘山・写真だより No.18、女王谷の言葉：ギャロンの語源と方言」

<http://wanli-san.com/ookawasan/P-folder/4Girl-18.pdf> を参照して下さい。

2) 女王谷の歴史の始まりは諸説あり、チベット文化研究で著名な元東京大学名誉教授の山口瑞鳳さんは「早くとも3世紀から始まる」としています。

3) 古代のチベット文化圏では山と湖が対になって信仰されていて、モルド山の山頂近くにも小さな湖があります。山が男神で湖が女神の場合もありますが、そうでない場合もあり複雑です。なお女王谷の最高峰は東部に位置する四姑娘山 6250m で、元来チベット系の地元少数民族の間でスコラジダ“Sukolagidda”（正確な発音が伝承されていない為この表記は暫定的です）と呼ばれる土地神の一つです。四姑娘山の主峰の周りにも湖が沢山あります。

4) 「女王・ム氏族の石」の解釈が主流ですが、ここでは「女王の尖った岩」を採用しています。なお女王谷に東女国を建てた「ダン氏族」の石であるとされない理由は、ダン氏族がム氏族の一派で且つム氏族由来のボン教が女王谷に広まった経緯に関わると考えられます。

5) ラモダンデンマの名前の一部“ラモ”が、美人になるよう願いを込めて今も女の子の名前に使われています。

6) 7世紀にインド仏教が伝来するまで吐蕃王国の国教だったボン教はシャンシュンから直接伝わったのではなく、吐蕃王国を建てたヤルルン王朝成立以前から女王谷出身の皇后等との婚姻関係を経て伝わったとする説があります（東方研究会やミュンヘン大学等でチベット文化を研究されている石川巖さんのお話に拠る）。

7) 4公国の伝承は女王谷の時代や地方によって変わり、丹巴北西部に位置するゲシザ（中国語で革什扎）と北隣の金川県北西部に位置するチョスジャ（中国語で綽斯甲）だけが共通しています。

8) 丹巴のボン教の高僧のお話に拠りますと、このモルド山神の絵は1000年以上の歴史を持つそうですが、モルド山神が男の軍神として描かれているので、絵その物は18世紀中期以降の作だと考えられます。

●大川さんのホームページはこちら <http://rgyalmorong.info/index.htm>

<http://rgyalmorong.info/scholaweb/conts.htm>

▲お知らせ：女王谷のHP（<http://rgyalmorong.info/>）に、当地の風情を紹介するサンプルビデオ（MP4形式8MB前後）1分余り×15本を追加しました。日本語HPに入って頂いて、先頭頁の左下に有る、「風情のあるビデオ」でご覧になれます。（<http://rgyalmorong.info/scholaweb/queenvideo-j.htm>）

今回のお題は白居易の名作『香炉峰下、新たに山居を卜し、草堂初めて成り、偶東壁に題す』でした。清少納言の『枕草子』に、この詩を暗示した有名な一節があるためか、日本人には特に親しみ深い詩です。

出典は『白氏文集』。これは、中唐の詩人白居易が74歳の時に、自撰によって完成させたもので、全75巻（現存するのは71巻）もある大著です。白居易はこの翌年の846年に亡くなっていますが、生存中すでに、遣唐使によって日本に自分の詩が伝わり、愛読されていることを知っていたそうです。

白居易は字を楽天と言い、白楽天とも言われますね。2018年の2月に公開された『空海』という映画の中で、若き日の楽天と空海という二人の天才が、生き生きと描かれていたのが印象に残っています。但しこれが史実に基づくものかどうかについては疑問があるそうです。

白楽天は李白の没後10年後の772年に地方官の家に生まれています。映画の中でも、李白や楊貴妃の全盛期と、その頃のことを文献で調べるシーンが出てきます。楽天と空海の交友が史実かどうかは別として、二人が同じ一時期に長安にいたことだけは確かなようです。

楽天は貴族の出身ではなく、今でいう地方公務員の家に生まれました。幼い頃から非常に優秀で、5、6歳で既に詩を書いていたそうです。安祿山の乱後の混乱期に、各地を転々とせざるを得ない時期があり、同年配の仲間たちとはや

や遅めの、29歳の年に科挙の試験に合格し、役人の世界に入ります。しかし、自己の信条や政治への批判を詩に書いて「新楽府」と称し、音楽に乗せて広めようとしたので、宦官たちに嫌われます。

30代後半で「左拾遺」という、地位は低いものの、皇帝に直言する役目の職に就きますが、母親の喪に服するために、3年間故郷に戻っている間に職を外されしてしまいます。それでもめげずに自分の意見を言い続けたために、とうとう左遷されてしまいます。

しかしその後、中央に呼び戻されるも、権力闘争に明け暮れる中央官界に愛想をつかし、自ら地方官を志願することもありましたが、その後、71歳で引退するまで長安や洛陽で役人生活を続けました。

『香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁（香炉峰下、新たに山居を卜し、草堂初めて成り、偶東壁に題す）』というこの詩は、白居易が江州（今の江西省九江）に左遷され、司馬という官職に任命されたときに詠んだものです。格調高い、七言律詩で平仄もきちんと規則通りに整えられた完璧な構成になっています。香炉峰とは廬山の山中にある山峰の一つです。白居易はこの麓に寓居を定めていました。「草堂」とは成都にある杜甫の草堂にちなんで名付けたものです。「卜」とは方位を占って住まいを定めることです。「題東壁」とは東側の壁に自作の詩を書きつけた、ということです。

bái jū yì
白居易

rì gāo shuì zú yóu yōng qǐ
日高睡足犹慵起
xiǎo gé chóng qīn bú pà hán
小阁重衾不怕寒
yí ài sì zhōng qī zhēn tīng
遗爱寺钟敬枕听
xiāng lú fēng xuě bō lián kàn
香炉峰雪拨帘看
kuāng lú biàn shì táo míng dì
匡庐便是逃名地
sī mǎ réng wéi sòng lǎo guān
司马仍为送老官
xīn tài shēn níng shì guī chù
心泰身宁是归处
gù xiāng hé dú zài cháng ān
故乡何独在长安

こう ろ ほう か あら さんきよ ぼく
「香炉峰下新たに山居を卜し
そうどう はじ な どうへき だい
僧堂初めて成り東壁に題す」

ひ たか ねむり た な お ものう
日高く 睡足りて猶お起るに 慵し
しょうかくきん かさ かん おそ
小 閣衾を重ねて寒を 怕れず
い あいじ そぼだ
遺愛寺の鐘は枕を 敬てて聴き
こう ろ ほう ゆき すだれ かか
香炉峰の雪は 簾を撥げて 看る
きやう ろ すなは な のが ち
匡 簾は便ち是れ名を逃るの 地
し ば な ろう おく かん
司馬は仍お老を送るの 官
こころゆたか みやす こ き
心 泰に身寧きは是れ帰する 处
なん ひと あ
故郷何ぞ独り長安に在らん

この詩の中の「遺愛寺の鐘は枕を敬てて聴き、
香炉峰の雪は簾を撥げて看る」という一句がこ
とさら日本では有名です。

『枕草子』の中にこのような場面が出てきます。
藤原定子という中宮の位にあった女性に仕えて
いた清少納言が、定子を囲むサロンで、定子に
「清少納言や、香炉峰の雪はどうなっているでし
ょうね？」と聞かれ、とっさに御簾を上げて、

目の前の山を香炉峰に見立てて見せたことで、
定子を満足させた、というくだりです。

この清少納言の機転に、まわりの女官たちは
「この詩は誰でも知っていて、歌にまで読み込ん
だりするけれど、とっさにあんな事が出来るな
んて、あなたはやはりこの宮さまに仕えるのに
相応しい方ですね」と賞賛したと、書いていま
す。「まあ、自慢話ですよ。しかし、この話が示
すように、平安時代は男女を問わず、漢詩を一
字一句違わず覚えるのがインテリである証^{あかし}だっ
たのですね。また、平安時代の日本の宮中では
李白や杜甫より白居易の方が人気があったとい
うことも分かりますね」と植田先生。

『白氏文集』は、白居易存命中に日本に伝わり、
平安文学に多大な影響を与えました、『白氏文
集』で白居易は自らの詩を「風論」（社会批判）
「閑適」「感傷」の三種に分類していますが、日
本では「閑適」、「感傷」の詩が特に好まれ、菅
原道真の漢詩は白居易と比較されたりしていま
す。また、『源氏物語』の作者紫式部は、藤原道
長の娘で後に中宮となった彰子^{しょうし}に、和歌や漢文
の教授をするほどの教養の持ち主でしたが、そ
の『源氏物語』も白居易の長恨歌から影響を受
けているそうです。

さて、この律詩の出だしでは、白居易の悠々
とした生活ぶりが伺えますが、実際のところ、
司馬という官職は今でいう軍関係の副官級で、
位は高かったものの、実際は何もやることはな
かったのです。ある意味、左遷させられ、干さ
れていたような日々でした。優雅さの裏側には、
「慵」の一字が示すように、何となく心のモヤモ
ヤが感じられます。

後半は、左遷地で、司馬という職に当たって

いるのは、余生を送るには丁度良い、身も心も安らかにいられる、と言っているのは、陶淵明に憧れていた白居易の正直な気持ちの一端であることは間違い有りません。

植田先生の解説は続きます。「しかし、最後の一句、故郷は長安だけじゃないぞ、というのは、東京だけが都じゃないぞ、と言ってるようなもので、半分中央で活躍出来ないことへの悔しさが滲み出ているように思いますね。その後、実際、白居易はまた長安に帰って活躍してますからね。第一線で詩人として政治家として活躍したいと言う気持ちと、中央で意に添わない生活を送るくらいなら、隠遁生活もいいなあ、という気持ち、どっちも嘘ではないんですね。まあ、悪く言えば中途半端。しかも、この人は大の女性好きでね。妓女たちにはモテモテ。おまけに側仕えの女性をとっかえひっかえしたりなんかして……。杜甫のように真面目一筋、妻一筋という性格でもなかったみたいです。とって李太白のように奔放不羈にも徹しきれない。まあ、男もいろいろですよね」。

先生の解説に、一同から笑い声が上がりました。こういう話があるからこそ、作者に親しみがわき、あれこれ想像を膨らませたぶん、作品もより印象に残ります。

白居易の詩は言葉が易しいことでも人気があったようです。当時の老婆や妓女たちにもわかる言葉を選んで詩を作ったとも伝えられています。それなりに心も優しくったのでしょうね。

それはそれとして、白居易のどっちつかず、都会も田舎も捨て難いという気持ち、個人的にはすごく理解できます。私自身も両方とも必要なタイプだからです。刺激的な大都会も、心安

らぐ田舎もどちらもバランス良く味わいたいというのが正直な私の欲求です。週4日ハイヒールを履いたら、あとの3日は長靴で土いじりも好きというのが私です。歴史上の偉人に対し、いささか失礼ではありますが、「都会で活躍と田舎で自適、どっちも好き」という白居易の気持ち、非常に分かる！ と思いました。

それに色気あるモテモテ男子ならなおのこと、陶淵明のように生涯地方に埋もれるのはちょっと無理だったのではないのでしょうか。白居易は音楽も得意で琵琶の名手、他に色々な楽器も出来たそうです。新樂府というジャンルを打ち出し、自己の信条や政治批判を詩に書くだけでなく、一方では自作の詩を妓女達に音楽に乗せて歌わせる、ということもさかんにやっていたわけですから……。今で言う人気の作詞家や演奏家の一面もあり、都会の女性達にはスター的存在でもあったのではないかと思います。そんな白居易が陶淵明に憧れるのは、やはり陶淵明のような世捨て人の境地にはなりきれないからではないのでしょうか？ しかし、野心もあつたからこそ、75歳という当時では非常に高齢で亡くなる前の年まで、75巻もの自身の作品集を完成することが出来たのだと個人的には思います。全くの純粹、無欲では、ここまで出来ないでしょう。

しかしそのような白居易も、最後は仏門に入ります。晩年は龍門の香山寺に住み、「香山居士」と号したそうですが、役人生活の後半に至って仏門に近づいたのも、権力や女性などに対する煩悩を断ち切れなかったからでは？ と思うと、この早熟の天才詩人も人間臭い身近な存在に感じられます。

さて、全員で順番に朗読練習をしたあと、メンバーの一人から、この時代の枕はどんな形をしていたのか？もしかしたら、枕を^{そぼだ}敬^{そぼだ}てて聞くとするのは、筒状になった枕が音を反響して鐘の音がよく聞こえるのではないか？という質問があり、一同で盛り上がりました。調べてみると、当時は陶器や木の硬い枕をしていたようなので、実際白居易がどんな枕をしていたかは分からないものの、筒状の陶器の枕で、鐘の音が反響したのではないかという想像もあり得ないわけでもない、と思いました。

いずれにしても、耳を敬^{そぼだ}てるのではなく、枕を敬^{そぼだ}てるという表現にはいくつかの論争があるようです。

さて、どっちつかずで女好きの天才詩人白居易のことを私は人間らしいと感じましたが、一方、平安朝きっての才女であった清少納言と紫式部が、直接の面識はなかったものの、互いに反目しあっていて、紫式部は清少納言を「嫌な

女だ」と酷評していることもまた、現代でもいかにもありそうな、人間らしくて面白いエピソードですね。

それにしても、男性しかまともな学問ができなかった時代に、唐という外国から来た文章を読みこなし、講義までできる教養と、それを独自の文章で素敵に表現する能力をもっていた清少納言と紫式部は、私にとっては、中国語と日本語の女神様みたいな存在です。対照的な性格の違いだったことも興味深いですね。私は自らが仕える^{ていし}定子が悲劇的な運命を辿るのに、彼女の人生の影の部分は一切触れず、明るい面だけを書ききった清少納言の決意ある行動も好感を持てるし、「あなた、底が浅いわね。そんなもんじゃないわよ」と言いたい紫式部の心情も分かる気がします。いずれにしても『枕草子』と『源氏物語』は本当に日本の宝ですね。文章を書くのに四苦八苦するアラフォー女子には、あこがれの女神たちです。

「漢詩の会」たより 29

(2019年3月24日)

賈^か島^{とう}の五言律詩「李^り凝^{ぎょう}の幽居^{ゆうきょ}に題す」

報告：花岡風子

今回のお題は賈^か島^{とう}（779～843）という中唐の詩人の五言律詩「李^り凝^{ぎょう}の幽居^{ゆうきょ}に題す」です。この詩人は、『唐詩選』にいくつか作品が載っているものの、日本では取り立てて有名というほどではありません。しかし、この詩から生まれた「^{すいこう}推敲」の二文字を知らない日本人はいませんね。文章を何度も練り直すという意味で使われる「推敲」はこの賈島のエピソードから生まれた言葉なのです。

この律詩の^{がんれん}頷^{がんれん}聯「鳥は宿る池^ち辺^{へん}の樹^{じゆ} 僧^たは敲^{たた}く月下の門」で、作者は「敲^{たた}く」がよいか「推^おす」がよいかと思い悩み、その二字を口ずさみながら、ノックする動作とプッシュする動作を繰り返していたら、夢中になってお役人様の行列に突っ込んでしまったのでした。歩きながら突っ込んだとも、ロバに乗ったまま突っ込んだともいわれています。「無礼者！」とひっ捕らえられて、行列の主人の前に引き出されたところ、そ

の主人は中唐を代表する大詩人、韓愈でした。「この二字のうちどちらが良いと思われますか？」と賈島が訊ねたところ、韓愈は「それは、「敲」が良いから」ということで、「敲」に決まったのでした。漢字一字の為に我を忘れて苦吟する賈島の姿に心打たれた韓愈は、さっそく彼を弟子にしたということです。

「まあ、これが本当の話だとすると、まるで劇画みたいですね」と植田先生。確かに劇画のシーンが眼に浮かびそうな大物との出会いです。行列に突っ込んだことでお咎めを受けなかったばかりか、作品の仕上げのアドバイスまでもらい、しかも弟子にしてもらえる。賈島にとっては人生で一度あるかないかの「運命がひっくり返る」瞬間だったことでしょう。しかも、この時生まれた「推敲」という二文字が千年の時を超えて、隣国日本で知らない人がいないほどの言葉になっているのですから。誠に「縁は異なるもの」ですね。

「ところで皆さんはどっちがいいと思われますか？ ギーっという音と、コンコンという音」と植田先生。月明かりの静寂の中で、木の扉が立てる音がこの詩を引き立てているのですね。月明かりの下、夜のしじまに響くのはギーっという不気味な音ではなく、澄んだ夜空にこだまするコンコンという音の方が、確かに趣があるように感じられます。

賈島は、家が貧しく、何度も科挙に失敗した後お坊さんになっていましたので、「僧は敲く月下の門」の僧というのは、賈島自身のことを指すと思われます。但しこの解釈には異説もあります。

韓愈の弟子になった賈島は、韓愈の推薦によって地方役人になれたそうです。「この人は何度も科挙の試験を受けたけれど合格できなくてね、ノンキャリアの地方役人にはなれたけど、小さな役職で、しかも新たな任務に就く前に病気にかかり人生終わったという、どことなくサエない詩人ですね。先月取り上げた孟浩然もタイミングの悪い人でしたけど、賈島さんもチョットねえ」。

植田先生にかかると千古の詩人も一気に身近な人になってしまいます。それに、いつも詩人の名前にさん付けなさないのに、今回は終始「カシマさん」なんて仰るので、いつに増して、その辺にいらっしゃるおじさまに思えてきます。

「まあ、サエない詩人ですけど、千年後に名を残しているんだから、希望の星とも言えますかね」。

tí lǐ níng yōu jū
題 李 凝 幽 居

jiǎ dǎo
賈 島

xián jū shǎo lín bìng
閑 居 少 邻 并

cǎo jìng rù huāng yuán
草 径 入 荒 园

niǎo sù chí biān shù
鸟 宿 池 边 树

sēng qiāo yuè xià mén
僧 敲 月 下 门

guò qiáo fēn yě sè
过 桥 分 野 色

yí shí dòng yún gēn
移 石 动 云 根

zàn qù huán lái cǐ
暂 去 还 来 此

yōu qī bú fù yán
幽 期 不 负 言

かんきよりんべい
閑居隣并少なく

そうけいこうえん
草径荒園に入る

やど ちへん じゅ
鳥は宿る池辺の樹

僧はたた敲くげっ月下の門

橋をす過ぐれば、やしよく野色を分わかち

石をいわ移してうんこん雲根動うごく

暫しばらく去まって環また此こに来たらん

幽期言ゆうきげんに負そむかず

(隣近所に家一軒もない静かな佇まい。

草茫々の小道が荒れた庭へとつづいている。

鳥は池辺の樹に眠り

僧(私?)は月下の門をたたく。

橋を過ぎるともう辺りの趣が違っている。

じっと雲を見ていると、その根元になっている石が動いているみたいだ。

ここはひとまず立ち去って又来ることにしよう、と、心ひそかに誓いながら私は帰途に就いた。)

頸聯けいれんでは、「雲根」という表現が出てきますが、古代中国では、岩山から雲が生まれているという観念があったそうです。確かに黄山や張家口などの幻想的な岩山の風景では、まるで山からもくもくと雲が湧き上がっているように見えなくもありません。「じっと雲を見ていると、その根元になっている石が動いているみたいだ。ということなんですかね。自分が山道を歩いているから、その山が動いているようだと言いたいのか、本当のところは賈島さんに直接聞いてみないとよく分かりませんねえ。いずれあの世に行ったら聞いてみたいと思いますけどね」。

植田先生はいつもこんなにユーモラス。あの世に行くことも何だか楽しみな旅のようです。「この詩は難解だし、全く違った解釈がいくつもあ

ります。まあ、好きか嫌いかと言われると、私は苦手の方ですけどねえ」のコメントには一同失笑してしまいました。

「今どきこういう生活は流行らないですね。働いてナンボの世界ですからね。詩の題名にある李凝さんは、一貫して隠居生活に徹している人、賈島さんは、そんな李凝さんに憧れつつ、引きこもってみたり、お坊さんになってみたり、受験に何度も挑戦してみたり、ノンキャリのお役所務めをしてみたり、フラフラと現代人と変わらなような気持ちをもってたんですね。それでも詩作に関しては、この道一筋で名を千載に残しました。ブレない根性とブレる心のせめぎ合いと言いますかね。そのコントラストがまた面白いですねえ」と今日も植田先生のユーモアが随所に炸裂した講義でした。

「ブレない」がカッコ良い生き方のキーワードみたいな昨今。ブレない人というのは何かをきっぱり捨てている潔い人。ブレる人というのは、どっちかを手放すことができなくて、どっちつかずなんですよ。アラフォー女子もどっちかと言うとサエない詩人の賈島さん側です。でもね、年とともに培った厚かましきで、エイやと居直ってカシマさんに本音トーク。

「そんな悟った人になれないよね。出世と隠居、どっちの生き方もカッコよく見えるよね？ その周りをウロウロして、ブレまくって、そりゃカッコ悪いかもしれないけど、それもナマの人生じゃないの。ねっ？ カシマさん」。

ところでカシマさん、あなたは本当にリギョウさんに会えたのですか？ 会えないまま引き返したのですか？ それとも、そんなことはどうでもよかったのですか？……。

6月の思い出 李晴

丁英が電話をかけてきたのは、ちょうど陽の光が気持ちのよい昼下がりの頃だった。受話器を取ると彼女の“彩雲”と呼ぶ声が聞こえ思わず笑ってしまった。彩雲^{註1)}は私の子供の頃の名前である。今でもはっきりと覚えているが、武先生の学級にはいり、最初に名前を読み上げられた時、先生は私の古臭い名前をからかい半分、調子を付けて読んだのだった。すぐに私は名前を改め、以後ずっとその名前を名乗っている。1978年の春も早い頃だった。

その年、私の住んでいる県の唯一の重点中学である巡鎮中学（日本の高等学校に相当）が学生の募集を再開した^{註2)}。ただちに各村の初級中学の2年生が沙泉小学校に集められ授業の補習をし、入試に備えることになった。丁英と永清は甲班、私は乙班で、私の組の担任は永清のお父さんである武先生だった。

武先生は他所の県の人で、当時もう40歳は過ぎていた。体つきは細く弱々しそうで、ちょっとやつれた顔立ちであったが、いつも温和な微笑をたたえていた先生だった。私は家が遠かったので学校に寄宿することにした。学校に住み始めた頃はまだ寒くて、いつもオンドルには火を絶やせなかった。武先生はそのことに特に気を配ってくれていた。夜が更け私たちが寝静まってしまっても、いつもまだ武先生は寝ることなく、ドアをそっと軽く押して部屋へ入り、さっと見廻してから手を伸ばしてオンドルの焚き口を触り、中を覗き込む。もし炉の火が強かったりすると、先生はすぐに棒を探してオンドルに敷いてある毛氈の下に差し込み、毛氈が焦げ付かないようにしてくれた。

6月はザクロが赤くなり、アンズが黄色く色付き、瓜のつるがするすると伸びてゆく頃だ。試験の4、5日まえだったろうか、友達が私にアンズを何個かくれた。黄色く柔らかいアンズ、微妙に透き通るような赤みを帯び、明るい

緑色の葉っぱがくっついていて、それはとても可愛らしかった。私は一口で食べてしまった。しかし誰も想像もしなかったことだが、まもなくわたしは嘔吐を始めた。続いて目の前が暗くなり、脚から力が抜け、ひっくり返りそうになった。同級生は急いで私を支えながら病院へと連れて行ってくれたが、ちょっと歩いては停まり、病院の入り口までたどり着くこともたいていのことではなかった。とうとう私は道端の柱にしがみ付くようにして気を失ってしまった。話を聞きつけた武先生は急いで病院に駆けつけて来た。救急処置をしてもらい、私は夜になってやっと目がさめた。その晩先生は私のベッドの横でずっと私を見守り、家には戻らなかった。その後の数日、私はそのまま入院をして治療を受け、試験の前の日々を過ごした。武先生は学校へ戻り授業をする以外は日夜ベッドの側で私の看病を続けてくれた。毎日、朝早く先生は粟で粥を炊いてくれ、一匙、一匙と私に食べさせてくれた。夜にはベッドの傍らにうずくまり、点滴の瓶を見守ったり、私に笑い話を聞かせて楽しませてくれた。

試験の当日の朝、先生は先にクラスのほかの生徒達を試験場へと連れてゆき、それから慌しく病院へ私を迎えに戻ってきた。先生は私を助けて自転車の上に座らせると颯爽とペダルをこぎ始めた。病院から試験場まではかなりの道のりがあり、先生は力を振り絞りながら用心深くペダルをこいでいた。背中の中のシャツは汗でぐっしょりとなってしまった。試験は3日続き、先生は3日間私を送り迎えしてくれた。照りつけるようなきびしい陽射しの下を一回また一回と先生は私を連れて病院と試験場を行ったり来たりしてくれた。その間遠く離れた所にいる父や母は私が病気で入院したことや、それでも試験を受けることが出来たことなどを全然知らなかった。

幸いにも私は試験に合格をした。その後の道は、あの一度の尋常ではない試験の跡をなぞっているようでもあるが、とにかく前進をし、今に至っている。もう20年もの年月が過ぎてしまった。その間、私が武先生に会えたのはたった1度、1985年の薄ら寒い日に沙泉の街角で偶然出会い、慌しく立ち話をした時だけだった。その後の10数年は茫々たる人の海の中にまぎれてしまった。現在、丁英と永清とは夫婦となり、武先生の傍らで寄り添いながら幸せに暮らしているようだ。彼らはまだ私のことを覚えていてくれた。私のあの古臭い名前も、あの6月の出来事も。 (訳：岩田温子)

■訳者注

- 1) 作者の李晴によると、「彩雲」は彼女の曾祖父がつけた名前です、大変古典的な名前で農家の女性や雇い人、水商売の女性などの間によくある名前だそうです。しかし、文化大革命を経たこの当時、このような名前は打破すべき古い封建的思想と結びつけられ、マイナスのイメージが強かったそうです。
- 2) 県の高級中学の入学試験が再開された1978年は、10年続いた(1966~76年)文化大革命が終わった2年後です。全国で大学入試が再開されたのは1977年でした。 (2001年6月号より)

【‘わんりい’ 短信】

東京下町 向島界隈ウォーキング

「わんりい会員の親睦の為に、ウォーキングをご一緒に楽しみませんか」と、厚木日中友好協会会員でもある‘わんりい’メンバーの浪花芳法さんから、表題のウォーキングの呼び掛けが2月末にあった。紙面に紹介のスペースがなく、ネットだけでの呼び掛けになってしまったが、4月6日(土)絶好の花見日和に恵まれて、全7名が参加した。

スカイツリー真下の押上駅に11:00集合。正に春爛漫の隅田川東岸沿いを歩いた。860年に創建された牛嶋神社では、体の不調部分と牛の同じ部分を撫でると治ると伝えられる「撫で牛」を撫で、



神社改築の折、白狐が現れて^{みめぐり}神殿の周りを3度回ったと伝えられる三囲神社を参拝。桜餅で知られる長命寺、江戸時代前期に開山の禅寺・牛頭山弘福寺などなどの古刹が川に沿って続き、向島が古くから開かれていた街を実感した。

深川生まれで、子供の頃の花見は隅田川と決まっていたが、隅田川に広々とした歩行者専用の、X型に架けられた橋があるのを初めて知った！桜橋というのだそうだが、完成して既に35年にもなっているとは！だ。

桜橋の中央辺りから川下を見晴らすと両岸満開の桜の帯が続き、行き交う屋形船の間を白いカモメが群れて飛んでいる。周辺は高層のビルばかりになったが今も昔に変わらない大川の春の景色が広がっていた。

長命寺の桜餅は既に完売で、言問団子で舌鼓を打ち、最後は、大都会の真ん中の可愛らしいオアシス、向島百花園で春の花々を楽しんだ。

(報告：田井光枝)



隅田川に架かる歩行者専用の桜橋からスカイツリーを見る

海外出張の思い出（ナイジェリア編②）

高島敬明

前回は、成田空港からナイジェリアのラゴスに向かう途中、オランダのスキポール空港に到着したところまででした。順調にきた旅がここからが様相が一変しました。ラゴス行きの便に乗るまでがまず一苦勞でした。日本人が誰一人いなくなり、つたない英語がどこまで通用するかと思うと、不安が徐々に増してきました。

まず朝の食事を摂ろうと旅行バックを押しながら、あれこれ注文しなくて済む食堂を探し歩きました。何とか大学の食堂のような、進みながら自分の好きなものをピックアップして最後に料金を支払う、というレストランが見つかりました。やっと食べ終わり、次に何時間後に乗る B 番スポット搭乗口を確認しておこうと歩き始めました。アフリカのような航空路はローカル線なので端っこの方なのです。進むにつれて粗末な身なりの太った男女が歩いて来ます。なぜか手には靴を持ち裸足で歩いて来ます。異様な光景にびっくりです。後で分かりましたが、彼らは帰国の切符を持ってないので不法入国者として強制的に送還される人たちだったのです。だんだん搭乗口が近づくにつれ黒人ばかりになってきました。そのうち館内放送がありました。〇〇便は、「1時間30分ディレイ」と聞こえます。飛行機が故障で遅れると言っているようです。搭乗口からすぐそばの飛行機を見るとタイヤの交換をしていました。また1時間半も待たされるのかとうんざりでしたが待つしかありません。

黒人ばかりの中にやはり不安そうにしている白人の青年がいました。話しかけるとスイス人で同じ便に乗るそうです。少しほっとしているとまた館内放送です。「〇〇便はアンゴラ行き」と放送しています。ラゴス行きのはずと思いながら心配なのでカウンターに確認に行きましたが、私の英語では「〇〇便は何時にラゴスに着くのか」と聞くのが精いっぱいでした。一瞬広大なアフリカ大陸で迷子になりはしないか、という思いが脳裏をかすめました。私は真剣

に、仲良くなったスイス人に同じ質問をすると、若者はアンゴラに行くと言い、ラゴスに着陸してまたそこから1時間のフライトで〈〇〇便はラゴス経由アンゴラ行き〉と言ってくれたのでいっぺんに不安は解消しました。英語力の無さに我ながら情けなくなりました。

飛行機はようやく離陸しました。8時間のフライトです。水平飛行に移った時、C 化工建設の本社での打ち合わせを思い出し、またまた不安が頭をもたげてきました。同社の説明によると、ナイジェリア空港は非常に治安が悪くおまけに空港内の管理能力にも問題があるそうで入国には非常に時間がかかるそうです。担当者と言ったやりのやりとりを思い出しました。『担当者』—「高島さん空港に着いて入国審査が始まったらたぶん長蛇の列でしょうが、最後列に並んで待っていてください。ジョンという黒人が参ります。お尻を軽く2～3度たたき合図しますからパスポートと入国カードをお渡しください。後はスムーズに行きますから」『私』—「待ってください。パスポートを渡すのですか？ 自分を証明するものが無くなりますがいいのですか？ 何かあればどうするのですか！」『担当者』—「今まで皆さんこの方法で入国しています。間違いはありません。入国すると C 化工建設と書いた目印を持った、貴方の担当の運転手が待っています。〈エマニエル〉と言います。空港から出たら荷物から絶対に手を放さないでください。泥棒が多いですから」と、他人事のような話っぷりでした。不安が払拭できないままやっとラゴス空港に着陸しました。アンゴラまで行くスイス人とお別れし、機外に出ました。

荷物を取ってどんどん進みますがものすごい混雑でどのゲートも長蛇の列。こんな中で先方は私を探せるのかなど不安になって来ました。20分も待ったでしょうか、さっきから私を観察していた黒人がさっさと手慣れた様子で近づいて来ました。軽く私のお尻をたたきながら、「Mr タカチマ、Mr タカチマ。

私はジョンです。「パスポートプリーズ」と言っています。私は、非常な決心をして「エイ、国際的な迷子になっても仕方ない！」と、パスポートを無言で渡しました。待つこと30分、慣れた手つきでパスポートとハンコの押された入国審査の書類が渡されました。そして先端が見えないほど並んだ人ごみの中をすいすいと入国してしまいました。すぐにジョンは次のお客様がいるらしく、また入国審査の中に戻って行きました。私は独特な匂いが充満している広い待合室にひとり取り残されました。しかし、待てど暮らせどC化工建設の目印を持ったエマニエル君は見当たりません。小一時間待っても来る気配がありません。私は意を決して鞆を肩からたすき掛けにし、2個のキャリーバッグは両手でしっかり押して広場に出ました。

そのとたん15～17歳くらいの粗末な身なりの子供たちに囲まれました。鞆やキャリーバッグに手をやって違う方向に、「マスター、マスター」と連呼しながら荷物の争奪戦をしているのです。言われていた通りでした。私はそこにしゃがんで、「ポリース・ポリースプリーズ」と絶対に手は放さないようにして大声で叫び散らしました。しばらくすると警察が飛んできました。子供たちは蜘蛛の子を散らすようにいなくなりましたが、私の荷物に手を掛けた子供は離れません。お客からバッグの運送の仕事ももらったと主張しているようでした。警察は太い警棒でゴツンゴツンとたたき始めました。子供は血を流しながら逃げて行きました。その騒ぎの中、やっとエマニエル君がびっくりしたような顔をしながら飛んできました。私を探さずに友達とおしゃべりしていたのです。車の置いてある所に行くともう一人、マイケルという運転手が待っていました。これから思いやられるな！と考え込みました。キャンプに行く道すがら沿道の住民の様子を見ていましたが、物騒で非常に貧しい生活が伺われ、現実の厳しい状況がよく分かりました。約1時間半走りましたが、空港からは比較的近いところに我々のキャンプがあり、暗くなった夕方無事に着くことができました。本当にやれやれです。

キャンプについて少し説明します。作業員を50名



ガーナ人の真面目なハウスキーパー4人のうちの2人。16～17歳位と思われます。(1980年1月)

収容できるコンテナハウスが、談話室、料理棟、食材庫を取り囲むように約30棟設置されています。金網の門を入ったところに役に立たない守衛が二人立っています。その奥に車庫があります。乗用車が4台、作業員の移動用の大きなバスが1台置いてあります。その近くにキャンプマネージャーのH氏(以下Hマネ)の部屋、私の部屋、日本人の料理人の部屋、ハウスキーパー4人(出稼ぎのガーナ人)の棟、それにメカニシャン1名の部屋と、今回の工事の司令塔とでも言える一角があります。この一角は鉄条網で囲まれて比較的安全と言えますが、我々の方が監獄にいるような感じでした。乗用車4台は私とHマネの使用する車です。車のナンバーの下一ケタの数字が奇数か偶数かによって都心に入る車が奇数日、偶数日に分けられているのです。従って4台必要なのです。コックさんは、ソ連と同じく料理会社「(株)魚国」の気のいいオヤジのTさん。メカニシャンはこのキャンプで一番大切な人ですが、当社の関係会社N商事のOさん、優秀な方で八面六臂の活躍でした。大事な発電機2台の管理、水道設備の管理、自動車の整備、冷凍設備の管理など彼が引き受けてくれた仕事は枚挙にいとまがありません。ハウスキーパー4人はまじめな人たちで一度も物がなくなるようなことはありませんでした。運転手は皆、南部の独立戦争で敗れたイボ族の軍人たちでした。概略このような体制で工事を進めて行ったわけです。次回は今回の工事のパートナーであり、キャンプの責任者でもあるHマネの人となりから続けて行きます。

(続く)

◇白居易登場

北朝鮮清津生まれの先輩とは時折、韓国へ歴史の旅を楽しむ。彼は漢詩、論語をよくし読み下し暗唱する。

ソウルの地下鉄3号線「高速ターミナル駅」近くにコンサートホールや映画館、美術展示場を備えた「芸術の殿堂」がある。ここで書芸展を鑑賞。白居易の七言律詩「香炉峰」の頷聯(がんれん)に気付く。篆書の繁体字だ。

遺愛寺鍾敬枕聽 香爐峯雪撥簾看

時空を超えて奈良時代の日本へ飛ぶ。遣唐使随員母は異国に送り出した子の安否を気遣う。

／…霜降らば吾が子育め天の鶴群／(「万葉集」巻九)

霜降る草枕に子は傷付き病んでいはいはしまいか。大和の空翔(かけ)る鶴たちよ、せめてわが子をあなたの羽で温めておくれ。まさに育むの語源だ。

植田渥雄桜美林大学名誉教授による「中国語で読む・漢詩の会」に入門。昨年暮れに「香炉峰」に再会し、律詩を旧字で半紙に書いて部屋の壁に張った。二胡奏者許可のCDを聴きながら朗読している。「長安の春」(石田幹之助)を旅したい。(栗生将信)

ようこそ！ SAMIRA イラスト館へ



フランスからはるばる届いた、
サミラさんのイラストです。
皆さんはどんなことをイメージ
されますか。

‘わりい’ 243号の主な目次

寺子屋・四字成語(22)匹夫有责……………	2
論語断片(46)知之为知之，不知为不知……………	3
お爺さん三人の大連の旅(3)……………	4
東西文明の比較(34) 天皇の呼称……………	6
四姑娘山写真日より(43)女王谷の神々(1) モルド山神……………	8
「漢詩の会」(28)白居易『香炉峰下、新たに山居を卜し、草堂初めて成り、偶東壁に題す』……………	10
「漢詩の会」(29)賈島の五言律詩「李凝の幽居に題す」……………	13
6月の思い出……………	16
わりい短信「東京下町・向島界限ウォーキング」……………	17
海外出張の思い出(ナイジェリア編②)……………	18
コラム「白居易登場」……………	20
サミラさんのイラスト館……………	20
‘わりい’ 掲示板……………	別刷

★5月の定例会

5月10日(木)…13:30～ 三輪センター第三会議室

★6月号おたより発送日

5月30日(木) 10:30～ 三輪センター
第二・第三会議室 (弁当持参)